

ライフコースとしての日本語学習

ベトナム人日本語学習者の事例

吹原 豊

〔キーワード〕ライフコース、ベトナム人日本語学習者、異文化間教育、自他理解

〔目次〕

はじめに

1. 調査方法

2. ライフコース論

2.1 ライフコース論とは

2.2 ライフコース論を用いるねらい

3. 面接資料から得られたこと

3.1 調査対象者全員に共通して見られた点

3.1.1 マクロな社会の変動に個人の生活が大きく影響されていること

3.1.2 全員が来日後カルチャー・ショックを体験していること

3.1.3 異文化接触を体験して自己変容をとげていること

3.1.4 日本での日本語教育および教育環境への不満

3.2 何人かに共通して見られたり、特に関心を引いたりした点

3.2.1 異文化に関連した差別や蔑視について

3.2.2 家族との関係

4. ライフコース論の視点から

4.1 社会変動とのかかわり

4.2 N日本語クラス

5. 調査者と調査対象者の自他理解

おわりに

はじめに

近年、異文化間教育という視点から日本語教育をとらえ直そうという動きが出てきている。異文化間教育には、異文化に触れることで多様な価値観の存在を理解し、自分や自文化を客観的に

見るきっかけができ、自分を内面から変容させる機会が得られるとする視点が含まれている。

本稿は異文化間教育の視点を意識しつつ、日本語教育を契機として自他理解へ至る道を、ライフコース論を手がかりにして探ってみようとするものである。そして、そのために、滞日ベトナム人日本語学習者を対象とした面接調査を行い、その資料を中心としてライフコース論の立場からの分析を試みた。

ここでいうライフコース論とは、後述のように「個人の一生を所属する社会とのかかわりで分析すること」を指している。

なお現在までのところ、定住ベトナム人の異文化適応や言語習得に関する研究は見られるものの、ライフコース論からの先行研究は無いといえる。

1. 調査方法

調査は1997年11月から1998年11月にかけて、5人のベトナム人を対象にして行われた。面接を中心にすえ、その他に観察、Eメール・手紙のやり取りという形で行われた。それ以外に、必要に応じて、この5人をよく知っている日本のNGO（非政府組織）V協会の理事やA日本語学校関係者にも面接をした。

およそ1年間にわたる調査の後も、5人のうち99年4月に帰国した1人を除いて、2001年6月までフォローアップもかねて断続的に話を聞く機会を持った。

5人はいずれもV協会がベトナムのホーチミン市内の国立大学と提携して運営する「N日本語クラス（全日制2年課程）」の卒業生である。筆者は以前このクラスで日本語を教えていたし、5人のうち3人はその当時の教え子でもあり、いずれの調査対象者との間にも良好なラポール（相互の信頼関係）が形成出来た。

5人のうち4人は愛知県内のA日本語学校で学ぶために（日本語学校卒業後、進学や就職したのも含む）、1人は東京近郊の短大に留学（その後4年制大学に編入。現在は卒業して日本の会社に勤務）するために来日した（表1 氏名はすべて仮名）（95年からA日本語学校はV協会とのあいだにN日本語クラスの卒業生を毎年1,2名、学費、寮費免除の特別奨学生として受入れることを含む業務提携を結んでいる。）

以下に、面接の例をあげる。

〔例1〕（筆者）お父さんは大学の先生で、知識階級で南の政府の側の人だったから解放の後恐いというか、悪い目にあうんじゃないかと...

ニュ：そう、その時サイゴンまだ解放されません。北から兵隊が進んできますね、共産党がフエに来たら私たちはダナンに逃げました。（中略）祖母もダナンですから、たぶん家

ライフコースとしての日本語学習

表1 調査対象者の属性（98年11月時点、仮名、敬称略）

	名前	性別	年齢	滞日年数	来日時期	現在の所属
1	ニュ	女	27	1年	97年11月	日本語学校生
2	ブン	男	28	3年1ヶ月	95年10月	院博士1年
3	ミン	男	27	3年1ヶ月	95年10月	会社員(自動車メーカー、事務職)/院修士2年
4	ナム	男	26	2年	96年11月	会社員(セラミックメーカー、事務職)
5	ラン	女	27	4年5ヶ月	94年6月	アルバイト(求職中)

族と一緒にいたほうがいいと逃げました。でもダナンにはもう(共産軍が来ていました)祖母と伯父と父とまた進んでサイゴンまで逃げました。私と母と兄弟二人は残りました。

〔例2〕ニュ：父と同じ大学ですから大変でした

それはどういうふうに変な (中略)

ニュ：先生の娘さんですよ、私はどこに行っても後ろは目があります。

いつも先生の娘っていわれるから

ニュ：...それに、もし成績がちょっと、悪いとはいえませんがちょっと下がったら、もう、すぐいわれます。あの先生の娘さんなのに、...あーっ、もういや

苦しい大学生だね

ニュ：何も出来ない

調査の中心にすえた面接は上の例に見られるように構造化の程度の低いものだが、何回も通うことで、同じ質問を別の形で繰り返してチェックすることなどもしている。また、面接は個別にされることもあったが、複数のメンバーが同席した場面で自由に行われることも多かった。とりあげられた話題は、一人一人の生活史(ライフヒストリー)、日本での経験、最近考えていることなど多岐にわたった。その中心は、どうして日本語を学ぶようになったのか、なぜ日本に来たのか、これからどうするのかといったことである。面接の結果はフィールドノートに書き込んだものもあるが、基本的にはテープに録音した。録音したものはすべて書き起こし、それを分析の対象とした。なお、この分析の大きな枠組みとなっているベトナム社会の変動については、調査対象者のライフコースとの関連で表に示した(表2)。

2. ライフコース論

2.1 ライフコース論とは

ライフコースを日本語にすれば「人生行路」ということになる。時間と空間の4次元からなる一本の道筋、それは、大久保(1995)の言葉を借りれば、「ある個人が一生涯の間にたどる、絶えず変動する社会構造内での位置(社会的位置、これは社会規範によって強く影響される)の変化の道筋であ

る」といえる。個人のライフコースはたとえば、結婚 子供の誕生 親の死 配偶者の死という「家族経歴」や、入学 進級 留年 受験の失敗という「学校経歴」、就職 転職 転勤 休職という「職業経歴」などが相互に依存し合ういわば「経歴の束」によって構成されている。ここで重要なのは、個人のライフコースが社会構造内での社会規範という圧力だけでなく、社会構造の変動（以下、社会変動とする）そのものに大きく影響されるということである。社会構造は家族制度や学校制度、雇用制度など諸々の制度の集合体であるといえるが、個人のライフコースは、たとえば「結婚適齢期」などという言葉に見られるように、その個人が属する社会の制度に大きく依存している。それゆえに、たとえば戦争や革命の前後など、社会制度の変更が多発的に起こった場合の個人のライフコースへの影響は絶大なものになるといえる。

大久保は、「ライフコース研究における事例分析の主たる課題は、対象者のライフコースを因果論的に説明することである。つまり「Aさんはなぜこのようなライフコースをたどったのか（別のライフコースをたどらなかつたのはなぜか）」という問題に答えることである。」（前掲、70ページ）とも述べている。ベトナム戦争やドイモイ（「刷新」と訳される、市場経済制の導入を柱とした包括的開放政策）など激変する社会で生育し、後に来日して日本語学校または大学で学習した調査対象者に関する資料の分析にあたって、ライフコース論を手がかりとする理由がここにある。詳しくは本稿2.2以下で述べることにする。

2.2 ライフコース論を用いるねらい

現在のところ、ライフコース論自体は明示的な仮説群を持つひとつの確定された理論というよりも、ひとつの新しいパースペクティブというべき段階にあるといえる。しかし、ライフコース研究ないしライフコース分析とされる研究に共通した考え方や特徴の中で、門脇（1990）によってまとめられた次のものは本稿にとっての枠組みになりうるものであると考える。

- 1) 社会全体とか家族を単位としたライフサイクルへの関心ではなく、個人の生活の軌跡（履歴）に主たる視点を置いてのこと。
- 2) 個々人の生涯の展開を歴史的な事件や時代の特性との関連で説明しようとする意図を強く持っていること。人間の成長を歴史の産物として見る視点を持っていること。
- 3) 同時代人として、また同一の社会の成員として不可避な共通体験に視線をこらすと同時に、その人だけの体験や事故・出来事との遭遇とそれらの影響にも強い関心を寄せること。
- 4) 同じ事件に遭遇し、同じ出来事を体験しても、その人によってそのことの解釈や意味づけに差異があることを無視しないこと。

ライフコースとしての日本語学習

表2 ベトナム現代史抄録 調査対象者(敬称略)のライフコースとの絡みで

年(月日)	ベトナム現代史および関連トピック	その年に起きた調査対象者のライフコース上のトピック
1945年8月15日	日本軍降伏。ベトナム民主共和国独立宣言(46年からフランスの再植民地化に抵抗する抗仏戦争始まる)	
1954年5月7日	北部ディエンビエンフーで仏軍敗北。第1次インドシナ戦争終結。(7月21日)ジュネーブ協定締結(翌55年、南部にベトナム共和国成立。国土の南北分断が固定化。主にカトリック教徒の北部から南部への大移動)	(ナム祖父 家族と共に南部へ移住。フン父親 南部に移住。ミン父親、ラン父親は南部から北部へ移住)
1965年	米軍の直接軍事介入始まる。北爆開始	
1967年8月8日	東南アジア諸国連合(ASEAN)結成	
1969年6月8日	南ベトナム共和国臨時革命政府樹立。(9月2日)ホーチミン主席死去	
1970年	米・南ベトナム政府軍、カンボジア領内侵攻	フン誕生(於サイゴン;後のホーチミン市《南》)
1971年	南ベトナム政府軍、ラオスに侵攻し大敗	ミン(於ハノイ《北》)、ラン(於ハイフォン《北》)、ニュ(於フエ《南》)誕生
1972年2月	ニクソン訪中で米中国交正常化	ナム誕生(於ダラット《南》)
1973年1月27日	ベトナム停戦発効。(3月29日)米軍撤退完了、米司令部解散。(9月21日)日本が北ベトナムと大使級外交関係樹立	
1975年3月26日	フエ陥落	ニュー家フエ陥落の混乱から逃れ、ダナン(車で4~5時間の距離)へ移動し、親戚宅へ身を寄せる
1975年4月30日	サイゴン陥落、ベトナム共和国(南ベトナム政府)消滅	ミン一家ハノイからチャチャン経由ホーチミンへ移住(76年)
1976年7月2日	ベトナム社会主義共和国成立(南北完全統一)	ラン一家ハイフォンからホーチミンへ移住
1978年12月	ベトナム軍、カンボジアに侵攻	ニュー家ダナンからフエへ戻る
1979年	(1月)ベトナム軍、カンボジアにヘンサムリン政権樹立。(2~3月)中越紛争(北部において中国と戦闘)	
1982年3月	ベトナム共産党第5回大会(現実路線へ転換)	ニュ中学入学。ロシア語を学び始める
1985年10月15日	(ソ連)ゴルバチョフ、ベレストロイカ政策発表	(筆者ベトナム初旅行)
1986年12月16日	ベトナム共産党第6回大会。ドイモイ政策提唱	
1987年6月17日	共産党書記長がドイモイ政策の推進を表明	
1989年	カンボジア駐留ベトナム軍撤退完了	フン(経済学)、ミン(経済学)、ニュ大学進学(ロシア語)、ラン音楽専門学校進学
1990年	バイカー米国務長官、ベトナムとの対話表明(戦後初対話)	ナム 医大受験失敗後、地元大学(英語)進学
1991年12月8日	ソ連邦崩壊。(11月)中国と国交正常化	ラン日本語クラス開校(以後Nと略す)、ラン入学(1期生)、ニュ大学でロシア語に加えて英語も学び始める
1992年4月18日	ベトナム新憲法公布(一党独裁、市場経済、改革路線の堅持)。(11月)日本政府が対ベトナム援助を14年ぶりに再開	ナム ホーチミン市内の大学(英語)へ編入
1993年3月	ヴォー・ヴァン・キエット首相、ベトナム首相として初訪日	ランN卒業、日系商社入社。フン、ミン入学(3期生)、Nフエ校開校。(筆者Nの教師として渡越)
1994年2月3日	米国が対ベトナム禁輸措置を全面解除	ラン来日、日本の短大留学。ナムN入学(4期生)、ニュNフエ校入学(2期生)
1995年7月12日	米国と国交正常化。(7月28日)ベトナムのASEAN加盟	フン、ミン卒業後来日、A日本語学校入学。(筆者 離越)
1996年6月28日	ベトナム共産党第8回大会、ドイモイ路線を発展させ、2020年までにベトナムを工業国とする路線を採択。(2月)中越国際列車(北京-ハノイ)復活	フン大学院修士課程入学。ミン日本で自動車メーカーに就職。ラン短大卒業後4年制大学に編入。ニュNフエ校卒業。ナムN卒業後来日、A日本語学校入学
1997年	新大統領、新書記長、新首相の誕生。民法施行。(アジア経済危機の影響で外資導入実績にかげり)	ミン自動車メーカーで働く傍ら、夜間大学院に進学。ニュ来日、A日本語学校入学。(筆者調査開始《11月~》)
1998年	APECに正式加盟。仏語圏首脳会議、ASEAN首脳会議開催(於ハノイ)	ナム日本でセラミックメーカーに就職。フン大学院博士課程進学。ラン 大卒後日本で貿易会社に就職
1999年		ニュA日本語学校卒業後、大学院修士課程進学。ミン帰国

加えて、代表的なライフコース研究者の一人である文化人類学者ブラス(1985)は、研究対象とした日本人のライフコース分析にあたり、とくに「関与者たち(associates)」、つまりある期間にわたって、しかもある程度の親しさを持って関係を保つ人々に注意を向けた。そして、生活史なる複雑な織物は、文化と特性と関与者たちの3者が絡み合うことで織り出されていくとした。

最後に、ライフコース論では社会変動とライフコースの関連を解明するために必要な一つの概念として「コーホート(cohort)」を重要視している。コーホートとは「人生上の出来事を一定の歴年時間において経験した人口集団」(石原,1987)を表わし、中でも一番よく用いられるのが、出生年を同じくする「出生コーホート」である。出生コーホートについては、完全に同一年生まれの成員によって構成されている単年コーホートが理想とされるが、10年程度の幅をもたせることも珍しくない。コーホート間の比較分析を行うことにより、たとえば戦前と戦後といった大きな時代区分による差だけでなく、5年・10年といった、小さな年齢幅による人々のライフコースの軌跡の差、その歴史的変性を明らかにすることが可能になる。

本稿では、ライフコース論の持つ上述のような考え方を援用することにより、ベトナム人日本語学習者と日本語教師を含む日本人の出会いの背景から相互作用の過程を、日本とベトナム双方の社会史の中でとらえ直すことを試みた。さらに、ベトナム人日本語学習者5人のライフコースと日本語学習を契機として彼らのライフコースに関与していった日本人との相互の影響関係を見ていくことにより、日本語教育を契機とした自他理解への手がかりが探りうると考えた。

3. 面接資料から得られたこと

3.1 調査対象者全員に共通して見られた点

3.1.1 マクロな社会の変動に個人の生活が大きく影響されていること

〔例1〕 ...言葉が得意な学生と数学が得意な学生は特別なクラスに入る

ニュ：はい(中略)

...中学校の時の文学クラスは、中心に勉強していることはロシア語だったの

ニュ：中心は(ベトナム)文学、でも外国語はロシア語です(中略)

で、ニュさんはロシア語を勉強する時というのは好きでやっていたんですか、中学に入る時に外国語としてどんな言葉を選ぶのか自分で選べるんですか...

ニュ：選べません。選べるなら私は英語、父も英語が出来るし母も少し出来ます、姉も母も手伝ってくれるかもしれないと思って...

〔例2〕 あのう、大学時代にすでに日本に限らずどこかの外国に留学したいという気持ちがありましたか

ライフコースとしての日本語学習

フン：留学、その時はなかったですねえ、なぜかというとアメリカも行きたいですけど、でもベトナムとアメリカその時はあまり関係よくないですから、行くのは無理自分は思いましたから、やっぱり日本だけでした

〔例3〕ミン：...その時(大学進学の時)考えたのは、もし技術的なことだけ勉強するとあんまりよくないですね、なぜかというとベトナムの技術のレベルは低いですから、どうしても勉強しても低いです

低いことを勉強しても意味がないと

ミン：意味がない、いつも、あの一、他の国を追いかけなければなりません、...

でもそのミンさんが大学に入る受験する前の当時というのは、(中略)もっと進んだ国がたくさんあるとかそういうイメージっていうのは

ミン：そうですね、その時ちょうどベトナムの、市場経済が一

ドイモイ(ベトナム共産党が進めている、包括的な改革政策)が始まってたんだよね...、86年(1986年)から一応ドイモイが

ミン：86年

ちょうど経済大学入った頃はそうだね高校生の時ドイモイ始まってるとかね、そうするとわりと新しい時代が来るといようなイメージっていうのはあったんですかね

ミン：はい

〔所見〕以上の例からも読み取れるように、ベトナム戦争やドイモイ、ソ連邦崩壊など、5人を取り巻くマクロな社会の変動が個人の生活、ことに人生上の選択肢の点で大きく影響していることが分かる。またこのことは、ここでの事例と表2に示したベトナム社会の変動とをつき合わせて考えると、さらに明確になってくることである。

3.1.2 全員が来日後カルチャー・ショックを体験していること

〔例1〕ニュ：私はそういう日本人を見て、どうしてそういう格好をするのか、親はどうしますか思った、考えられない...若者はまだ許せますが、年寄りでも急にこの辺(頭髪のこと)が白くなった、黄色とか

お年寄りがこの辺が白くてこの辺が黄色くて (中略)

ニュ：テレビで

テレビ、あ一、芸能人 (中略)

ニュ：だけど一、ショックしました

どんなこと、さっきの芸能人のこととか

ニュ：普通の人とかも全然違います

普通の人全然違うとは、たとえばどんなことですか

ニュ：たとえば芸能人と普通の人全然違いますが、前私は日本人はこれだ、礼儀正しいとかまじめに仕事をします(とっていました)でもどうしてそういう人があるのか分からない、矛盾です

自分が正しいと思っていた日本のタイプとかがあって、それと違うものを見たらどうしてなんだろうと思ってしまう

ニュ：...すごくまじめな人もそういう人もどうして一緒に暮らすことができるのか分からない

〔例2〕ミン：日本語学校で勉強をした時ですね、先生は私のクラスにそういう外国の学生から見る日本のイメージというアンケートがありますね、みんな自分の意見を先生に出したんです、(私は)大体ある中国人と同じ意見、最初日本に来てから色々番組とか色々ちょっとおかしいことを指して色々変な日本人を指して全然理解出来なかったんです。でも後で彼(中国人)は不思議なことはたぶん自分が理解出来ないのでからそう思ったんです(中略)たぶん僕らはベトナムでしょ、あの他の、中国人は大体共産圏の国ですからいつもみんな一緒のタイプのライフスタイルに包まれていますから、ちょっともし変わった考えとか変わったアイデアとかと接触するときちょっとショックを..(後略)

〔所見〕ベトナムから日本への文化間移動によって生じた異文化接触によって、全員がカルチャー・ショックを体験している。カルチャー・ショックについては、「日本に来た留学生に多かれ少なかれ経験されるものである。」(井上,1997)とされており、とくに来日以前のベトナムでの乏しい情報から導き出された対日イメージと来日以降の実体験のギャップが大きいほどショックも大きいことがうかがわれる。急速に自由化が進んでいるとはいうものの、自国の社会システム上(共産党独裁の社会主義国であり、情報統制が行われていること)情報という意味で過少もしくは画一的な面があり、たとえば日本のように情報が氾濫している社会に入ることによってショックが起こりがちな傾向がある。例をあげるとすれば、マスコミなどによってもたらされる、芸能人などのファッションや発言内容、肉体の過剰露出を含む女性の商品化に関するものに接した場合に見られるものである。さらにベトナム人に特徴的であると思われるのは、自国の歴史認識とは異なる認識を持つ側(日本も含む西側諸国)の情報に触れて一様にショックを受けていることであろう。たとえば、自国では隣国の脅威に対する防衛戦争(=正義)であるととらえられているトピックが、日本のメディアに「ベトナムのカンボジア侵攻(または侵略=悪)」として報道されていることを知ってショックを受けた例に見るようにである。

3.1.3 異文化接触を体験して自己変容をとげていること

〔例1〕ナム：世界は毎日変わっているから自分も変わらないと存在出来ませんね、で、いつも私たちは、これは絶対正しい、正しくない、だけどだんだん変わってくる、もし自分が変わらないと一緒に生きることが出来ません、共存することが出来ません(中略)だから、ちょっと心を開いて、あっ相手は違いますねえ(と)出来るだけ理解します、それ多分将来の生き方かなあとと思います、いつもどうしてどうしてばかりだったらつらいし

〔例2〕ラン：...向こう(ベトナム)にいた時は、すごい自分の知識と能力を高めて、バリバリ仕事したいって思っていたんですね、...あと一夢もすごい大きかったし、外交官になる。でも一、だんだん、まあ日本に来たからかどうか分からないんですけど、今になってくると、仕事はまあ生活するには必要だけれど一、ほんとは仕事をしなくても生活出来るのなら仕事はべつに一

楽なほうがいい、宝くじが当たったらべつに働かなくてもいいんじゃない

ラン：そうそう、あと一、向こうにいた時は仕事といってもデスクワーク、何かかっこいい仕事したかったんだけど一、だから社(ベトナムで働いていた日系商社)に入った時に何か電話の当番しかやらせてくれなくてちょっとショックだったんですよ。でも、今から考えると責任重大な仕事よりも確実に出来る仕事のほうが今はいいと思いますね。(中略)家に一、家族に電話した時に、どんな仕事をするのっていわれて色々しゃべったんですね、こういう仕事こういう仕事、朝は(会社に)来て掃除とかして一。親とか兄弟はすごい驚いて一、それ何で大学出て一

掃除なんてしてるんだと

ラン：たぶん向こうにいたら同じような考え持ってたんだろうけど、今は全然それが普通でなんとも思わなかったんですね、だから家族と話す時は一、あんまりいうと向こうが心配になっちゃうからあんまりしゃべらないようにしてるんですね。自分の中ではなんでも、なんでもいいですね仕事は、それがすごく自分の中での、変化がいいか悪いかはともかくとして、何ででしょうかね

〔所見〕5人全員が日本における異文化接触の結果、自己変容をとげており、またそのことを自覚していることが確認された。変容の具体的な特徴は、「マージナル・マン化」という視点から見る事が出来る。マージナル・マンは、「互いに異なる文化を持つ複数の社会(集団)に属することからいずれの社会(集団)にも帰属しえず、それぞれの社会(集団)の境界に位置する人間のこと。」(坂田,1985)と定義される。本稿ではマージナル・マンを、「自分の属する社会や文化への単純な融

合や同化とは異なって、人生や現実に対して創造的に働きかける契機をも内包している、相対的に啓蒙された存在」として肯定的にとらえたい。この定義に従えば、調査対象者すべてがマージナル・マンであるといえる。滞日期間が長くなり、異文化適応が進むにつれて、ベトナムと日本のどちらにも偏らない相対的な視点を身につける傾向が見られた。

そして、これらの自己変容をもたらす原因を作ったといえる留学とそれにつながる滞日経験については、たとえば「自分の人生を広げたという意味で大きな出来事であった」(フン)という発言に見られるように、調査対象者全員が肯定的に評価している。

3.1.4 日本での日本語教育および教育環境への不満

〔例1〕 授業についてね、ベトナムと違うなあとか、ベトナムで思ってたことと違うということは特にな

ニュ：先生はうまく説明してくれなかった、A日本語学校の先生です。たとえばどう違いますかと聞いたら、まあ同じだね、何でも同じ、もう一困ります

確かに日本人でも区別出来ない表現っていうのはたくさんあるんだけどね

ニュ：たとえば、これはその場合はこう使いますあの場合はああ使います、それだけです。どうしてこの場合そう使うのかは教えてくれない(中略)もし先生が説明したら、もっと、もっともっと難しいです。分からなくなる(中略)だから分からないことがあったら辞書を引く、それが一番です(中略)

一番やだなあって思う授業ある、こういう授業はつまらない退屈だって...

ニュ：先生がいっぱい説明しまーす、でも頭の中に何も残っていない

〔例2〕 ...中国人が多いと中国語でしゃべっちゃうとか...

ニュ：中国人みんな中国語で話しています

...せっかく授業に来てるわけだから逆にもったいないっていうかね

ニュ：だから前は短期生(短期語学留学生)のアメリカ人が来て、ニュさんどうしますか皆は北京語ばかり、私はまだアメリカ人のクラス出て英語でしゃべる人もいますがニュさんはどうしますか。(私は)べつに

べつに気にしないって

ニュ：うん、その人は一ヶ月なのにいつも寂しいと感じます。で、皆いつも韓国語と北京語で話しますから

先生はやっぱり注意するわけでしょう

ニュ：注意しても意味がない。(中略)特に悪いのは文句をいう時には韓国語と北京語で

ライフコースとしての日本語学習

いう、先生にきか...

聞こえないように、聞かれないように...

〔所見〕5人の中で、直接大学に入学した1人を除いた全員にA日本語学校における学習体験があるが、いずれもそこでの教育と教育環境に対して不満を持っていることが分かった。日本国内の日本語学校に共通する問題も含まれていると思われる。不満の具体的な内容としては、学習者が母語別に固まってしまい授業中でも母語を用いる傾向があること、様々なニーズ、レディネスの学習者が同一クラスに混在していること、授業が(母国でのものと比べて)厳しくないということ、教師の日本語教授能力、授業内容に対する不満、などがあげられた。

これらの不満は、先行研究の中で留学生からの日本語教育に対する不満としてあげられているものと一致するものが多い。たとえば、教師の日本語教授力に関してあげられたものとしては、類似表現の使い分けの説明に関するものがある。説明の際に例文を用いるという教師側のストラテジーが必ずしも学習者の理解を促す助けにはならないという発言が見られた。それは、用いられた例文が不適切な場合だけではない。適切な例文を用いて、どのような場合にある表現を使用し、またどのような場合に別の表現を使用するのかということが理解出来ても、なぜそのような使い分けをするのかということまでは教えてもらえないという教師経験者にとっては耳の痛いものであった。調査対象者から出された不満の背景としては、自国で受けた学校教育、来日以前のベトナムにおける日本語教育との比較によるものや学習者自身の持つ教師観などが影響していることが考えられる。たとえば、今回の調査対象者からは、知識が豊富で教え方も上手な「万能教師」を理想とする発言が何例かに見られた。しかし、学習者自身が日本での滞在目標を明確に持っている場合、あるいはそれが次第に明確になっていくにつれて、日本語学校のシラバスからは一定の距離を保ち、自律的学習を取り入れるようになる傾向が見られるようになる。たとえば、「...上手になりたかったら、やっぱり自分努力しないとだめですね、先生に、その授業だけに頼るのは足りないと思いますね...」(フン)といった発言はこのことを示している。

3.2 何人かに共通して見られたり、特に関心を引いたりした点

3.2.1 異文化に関連した差別や蔑視について

〔例1〕フン：はっきりというと、やっぱり外国人は日本に行くのには一つはお金のためというの(日本人の偏見)はですね、もう一つのタイプは、あの、それお金のためじゃなくて(知識や技術の吸収のため)でもどうしても日本人と同じレベルになれないという考えかた多いですから、...でも実は同じレベル(だと)自分は思っているんですよ、でもやっぱり(日本語は)外国語ですからなかなか自分の感覚とか表現出来ないですからどうしても同じレ

ベル(であると日本人が)認めてくれないですからそれはいやですね、...同じ仕事、同じ仕事ですけど、結果はどちらが効果があるかという外国人の方は(が)悪い(劣る)といえないですね

悪いとはいえない場合

フン：同じレベルでも認めてくれないですね、僕外国人ですから

...それは自分自身についても感じることですか、外国人一般

フン：そうですね、僕じゃなくて、みんな

一般的な話ですか

フン：ほとんどみいーんな、そう思っているんですよ(語気強い)

[例2：ナムに面接を行い、フィールドノートに書き取ったものから]

「...日本人の中に入れない感覚がある。たとえば、日本人が自分と話す時、外国人はダメ、というようなコメントをするのを聞くと、(たとえばベトナム人である自分のことではなく、会社で働いている他の日系ブラジル人のことをいっているのだと分かってはいても)相手の日本人が自分のいない時は他人の前で自分の悪口をいっているかも...と思い、その相手を受入れられない感情が湧いてくる」

[所見]差別や蔑視をする側は無意識であってもそれを受ける側は鋭敏にその意識を知覚している。具体的に知覚された差別や蔑視についていえば、日本人のアジア人蔑視に関するもの・日本企業の外国人社員の雇用についての問題。「相手の立場に立つてものを見る視点を欠いている」日本人に対する不満。アパート契約など住居差別に関するもの。など多岐にわたっているが、「(西洋人以外の)外国人であるがゆえに、優れた能力や業績であっても評価されない」(フン)といった指摘が日本社会に向けられている。

3.2.2 家族との関係

[例1] フン：僕はね選択する時はね優先、家族優先ですよ、...何かやる前は何かいろんなことを考えているんですよ、やっぱりいろんなこと考えてやっぱり反対されない方法かなと

ああ考えるわけだ、反対されないようなことを

フン：方法

いつも家族が頭の中にあるわけだ

フン：だから本当はね、僕やること家族(に)あんまり反対されてないし(中略)

(結婚の話題に関連して)

こういう面がある人(女性)がいいっていうのは何かありますか

フン：やっぱり家族大切にする人ですね、(そういう人は)なかなかいないでしょう、よく(考え方が)古い(と)いわれるでしょ

それはフンさんの親とか兄弟を大切にしてくれる人という意味ですか

フン：うん、今ってそんな人いないでしょう

〔例2〕 家庭のイメージとかありますか

ラン：あー、家庭のイメージはあります、まあ—どんな人と結婚するか分かりませんが、自分が育ってきた家庭と全く同じじゃないにしてもそれに似たような家庭を作る

やっぱり自分が育った家庭っていうのがある程度理想の姿だと思ってるんですねー

ラン：はい

いい家庭に育ったんですね

ラン：まあ少なくとも、自分は兄弟とそう思ってるんです、よそからはどう見てるのがわかりませんけど

〔所見〕妻子を残してポートピープルとして荒海を渡り、移住先で何年もかかって成功を収めてから妻子を呼びよせたり、何年も遠く離れて暮らしながら家族や夫婦の絆を保ったりしている例に見られるように、今も儒教的価値観が根強く残るベトナムにおいて「家」や「家族」といったものは重要な意味を持つといわれている。戦争とそれに続く社会変動によって、ものごとの価値がめまぐるしくうつろいでいく中、家族のほかによりどころを求めるのは難しい。家族の結びつきが強いと評されるベトナム人の家族観が聞き取りからも色濃くうかがえる。

加えて、ライフコース論との関連でいえば、社会変動が直接個人のライフコースへ影響することもあれば、それぞれの事例を支える家族を通して影響する場合もある。人生の時間軸上で輻輳する影響関係をうかがうことが出来る。

4. ライフコース論の視点から

4.1 社会変動とのかかわり

2.1ですすでに取り上げたように、ライフコース研究の利点としては、個人の人生上の出来事と全体社会の変動との間に存在する目に見えない因果関係を顕在化出来るというものがある。ここでは、本稿における5つの事例の中から、ベトナム社会やそれを取り巻く国際関係の変動の影響が明瞭に読み取れる部分を紹介したい。

まず、ニュの事例について見ていくことにする。彼女は、中学入学時に文学など文科系の才能に秀でた生徒を集めた特別クラスに入れられて、ロシア語学習を強制されている。彼女は80年代

前半に中学に進学している。当時のベトナムは70年代後半の中越紛争による中国との関係悪化の反面、ソ連を中心とする東側諸国との関係が深かった。そうした背景と彼女がロシア語学習を強制されたこととの間には明らかな因果関係が見て取れる。ロシア語学習でつけ加えれば、後年彼女にとって大きな夢となったソ連留学は、大学でロシア語を専攻していた当時に起きたソ連邦崩壊によって実現目前で潰えている。

筆者がベトナムに在住していた当時、新たに英語や日本語を学び始めた人々の中にはロシア語に堪能な者が多く含まれていた。ドイモイというベトナム社会を大きく揺がす社会変動を背景にして、ロシア語の需要に英語や日本語の需要が急速に取って代わりつつあった。そういった背景から、英語や日本語の教育機関にニューに代表されるような一種の語学エリートたちが流れて来たのも無理のないことである。

フンの事例には、特にドイモイの影響が見て取れる。彼は大学で経済学を専攻している。ドイモイが提唱されたのは彼が高校2年在学中であり、高3時にその推進が国家指導部の方針として確認されている。そうした新時代到来の息吹が進路決定に影響しているようである。彼は大学進学後の授業で、色々な教師が日本について紹介してくれたことによって日本への関心が芽生えたと述べている。中学の歴史教科書がドイモイ以降、それまでの「帝国主義衰退史観」により描かれたものから、日本の発展について肯定的な記述が見られるようになったことからしても、授業で紹介された日本は魅力的な先進社会として描かれていたことが想像出来る。そのような背景から彼は大学在学時から日本への留学を夢見ることになった。また、ちょうど時を同じくして、ホーチミン市内にN日本語クラスが開講されたこともライフコース上のタイミングとして重要である。加えて、日本留学に関連した聞き取りの中で、「(留学先として)アメリカにも行きたかったが、当時の米越関係から判断してアメリカ行きは無理だと思った」という旨の発言が見られたのも興味深い。米越国交正常化は95年のことである。フンの大学卒業時には合法的なアメリカ行きがほぼ不可能であったため、日本への関心を高めていた面もあったようである。

最後に、ナムの事例について見てみたい。彼の場合はバックグラウンドまで考慮に入ればベトナム現代史における社会変動の影響を大きく受けているように感じられる。彼の祖父はベトナムが南北に分断された際に、北部共産党政権の宗教弾圧を恐れて南部に移住したカトリック教徒であった。旧南ベトナム政府の将校になった祖父は、サイゴン陥落後のベトナム共産化の中で反体制運動を組織して失敗し獄死した。親戚の中にはボートピープルとして海外に逃れた者も多いという。故郷にとどまった父も、人生に対する望みを半ば失ったように生活を送っていたようである。そのような、いわゆる南部解放にはじまった一家の斜陽は、少なくとも彼の大学在学中まで続いた。彼には、5人の調査対象者の中で、最も日本とベトナム双方の国から距離を置いている

ライフコースとしての日本語学習

ことを感じさせる発言が多い。その背景には、自らを翻弄した社会変動の影響により、国家というものに対して抱くようになった不信感とでもいうべきものが存在しているようである。

加えて、ナムにもフン同様、「アメリカにも行ってみたかったが、アメリカ行きはかなり難しい状況だった」という趣旨の発言が見られる。大学で英語を専門にしていた彼は、英語を究めるには英語圏の国で学ぶ必要があると考えていた。それが困難であるため、希少価値のある日本語を学び始めたという面も見受けられる。彼のN日本語クラス在学中にアメリカとの国交が回復されたこと、現在では英語力が高ければ奨学金などを得てアメリカに留学出来る可能性が出てきていることを考えると、ここにもライフコース上のタイミングの問題が現れてきている。

4.2 N日本語クラス

本稿における調査対象者全員がベトナムで日本語を学び、現在に至るきっかけを作ったのはN日本語クラスである。この日本語教育機関設立のタイミングにもベトナムと日本の双方の社会変動が大きく関わっている。

N日本語クラスの運営母体は東京にその本部を置くV協会というNGOである。V協会は第2次世界大戦末期に日本軍の支配下にあったサイゴン(現ホーチミン市)に建学された外地の高専校「N学院」(文部省、外務省共管)の卒業生によって組織されている。このN学院設立の趣旨は、「東洋民族の共存・共栄、邦人発展のため、その第一線に立つ指導的な人材を養成すること」(亀山,1996)であり、大東亜共栄圏の理想を実現し植民地経営のエキスパートを養成することにあつたようである。学業半ばの1944年に現地徴兵され、日本の敗戦によって母校が閉鎖・廃校となったN学院の卒業生達はその後、自身が選りとったベトナム行以降の日本とベトナム双方の激しい社会変動に翻弄されることになる。終戦の段階で連合軍の捕虜になっていた者、ベトナム残留の道を選びベトナム民族解放闘争に身を捧げた者(その後時を経て帰国、ベトナムに残った者の中には今もって消息不明の者もいるという)彼らが、それぞれのライフコースを経て、終戦から46年後に設立した団体がV協会である。

前に見たように、ライフコース論では「コーホート」の概念が重要視されている。この場合にもN学院卒業生たちが(出生年に3年程度の誤差があるが)、ほぼ同一の出生コーホートに属していることが重要である。戦時下という時代背景の中、N学院在学を中心とした特殊体験がこのコーホートによるN日本語クラスの設立に大きく関与していると考えられる。V協会の設立時には、戦後の日本の経済成長を背景として日越両国の間に大きな経済格差があつたこと、構成員の年齢が60歳代前半という時間的、金銭的余裕に恵まれていたこと、当時の日本は「バブル経済期」と呼ばれる一種の社会変動期にあつたこと、などの要因を背景としてN学院卒業生の間にベトナム

に対する働きかけへの基盤が培われていたと考えられる。

一方、ベトナム社会の「ドイモイ」と呼ばれる社会変動は、それまで主としてソ連を中心とする東側諸国との間でのみ成り立っていたベトナムの国際関係を西側諸国へ向けさせる役割をも果たした。それによって日本を含む西側諸国からの投資や援助を受入れる基盤が築かれることになった。ベトナム人も自身のライフコース上に、海外への視野の広がりを獲得することが出来るようになったのである（その具体的な例は英語、日本語学習熱や外国系企業への就職熱として見られる）。

以上のように、日越双方の社会変動の影響が一方ではN学院卒業生によるN日本語クラス開設という形になって現れ、他方でそれはドイモイ以降の社会変動と相まって、調査対象者たちのライフコース上の選択肢を左右した。その結果、滞日に至る現況を作り出しているのである。

ライフコース論の立場からの分析を試みることで、N学院卒業生とN日本語クラス卒業生との相互のコーホート間の影響関係を日本とベトナムとの社会史の枠組みの中でとらえることが出来たといえる。

ライフコース論の視点がベトナム人日本語学習者の背景と日本人の「関与者たち」との相互作用を読み取ることに貢献している。

5. 調査者と調査対象者の自他理解

本稿では調査手法として面接、それもあえて質問項目を限定せず生活史の聞き取りを中心とした雑談形式のものを中心的に用いている。このことにより、聞き手としての筆者をも巻き込んだ対話が成り立ったといえる。複数のベトナム人の中、筆者が唯一の日本人としてマイノリティーの側に立たされることがあった。彼らにとってときには不思議でありときには不条理である日本社会の諸相について、つねに日本人として社会的文脈から説明や解釈を加えることを要求されているかのようなプレッシャーを感じることもあった。彼らから関与者としてだけでなく、日本人代表として見られているように感じてとまどうこともあった。たとえば本稿2.5に関連した聞き取りの中で、外国人留学生であるがゆえに日本人には追いつくことが出来ない、業績の優れた点をも認められないといった指摘は筆者にも向けられた。それは、当時大学院生であった筆者にとって厳しい問いかけではあったが、自分の偏見や差別意識を内省すると同時に、同じ研究室で学ぶ留学生たちの気持ちを忖度する契機になった。

あらかじめ用意しておいた質問項目に答えてもらうという形式をとらなかったため、客観的な立場を維持しようとしつつも、その場の話題に巻き込まれて、互いの価値観がぶつかり合うような緊張感を感じることもあった。家族観、結婚観、職業観、宗教観、友人に代表される関与者の役割などについて、夜がふけるまで異なる意見を延々と交し合ったこともある。また、ベトナム

ライフコースとしての日本語学習

滞在で培われたものの見方によるものであろう、彼らとの間に世界観を共有しているように感じる場合も数多くあった。2年のベトナム滞在から帰国しての日々で筆者自身が感じていた閉塞感や違和感に彼らの抱える異文化ストレスがときとして重なり合った。以前からの経緯で、教師として扱われつつも、指導教官との関係や研究の方向性など同じように悩みを抱える大学院生同士として意見を交換することもあった。実学志向が強いわりに学んだことをベトナム社会に還元することを躊躇し、機会が得られる限り日本で学びつづけたいとする態度に違和感を抱いた。しかし、ベトナム社会の現状を異文化の中で変容しつつある視点から注意深く観察し、帰国のタイミングに悩む姿に共感も覚えた。

調査を通じてこうした過程をたどることで、調査者も調査対象者と同じように自文化と異文化の間を彷徨する存在であることを実感した。彼らとの対話をもたらず相互作用が筆者自身の自我理解をも促す契機となった。ベトナム滞在時の2年間、新米教師であった筆者にとって、教師としての成長についてもベトナム社会への適応についても、その大半は彼らとの関係の上に成り立っていたことを再認識した。彼らにとって筆者が関与者の役割をしているのと同じように、筆者のライフコースにおいても彼らが関与者であることを実感した。

さらに、一旦調査をまとめあげた段階の99年1月末に、フォローアップのために行われた聞き取りで、興味深い発言が聞かれた。2人の調査対象者から、調査過程とその産物によって「自分のことがよくわかった」という反応があったのである。日本での異文化状況下で選択してきた認知と行動のパターンが反省材料として自覚された。また、自分自身で漠然とは自覚していても、言葉に出来なかった自己変容の軌跡が目に見えるようになったというのである。筆者との対話をもたらず相互作用が彼らにも自我理解を促す契機となったようである。

おわりに

筆者には、1985年のベトナム初旅行と1993年から2年間の滞在を通して、ベトナムの社会史について漠然とした理解はあった。しかし、調査過程を通じて、日本語教師としてベトナムにいた当時のことを見つめ直すことが多くなった。それは、筆者自身とベトナム人学習者のライフコース上の接点を日本とベトナム双方の社会史上に位置づけようと試みることであった。その結果、筆者とベトナム人学習者双方が、社会は違って共通する課題と歴史の違いからくる別々の課題を抱えていることに気づかされた。加えて、一人一人の調査対象者のライフコースとのかかわりという点でいろいろな道筋があることも分かってきた。

こうしたライフコース論を手がかりとした視点はベトナムだけでなく、筆者が関心を持っている他の東南アジア社会でも有効であると予想される。ベトナム以降、筆者が日本語教師として居

住することとなったマレーシアと現在の居住・活動地域であるインドネシアについても、今後ライフコースと日本語学習のかかわりについて見ていきたい。

〔参考文献〕

- 石井米雄編（1999）『ベトナムの事典』同朋社
- 石原邦夫（1987）『現代日本人のライフコース』日本学術振興会
- 稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久編（1988）『教師のライフコース』東京大学出版会
- 井上孝代編著（1997）『留学生の発達援助 不適應の実態と対応』多賀出版
- 大久保孝治・嶋崎尚子（1995）『ライフコース論』放送大学教育振興会
- 門脇厚司（1990）「教育社会学におけるライフコース研究の可能性」『教育社会学研究第46集』、17-33
- 龜山哲三（1996）『南洋学院』芙蓉書房出版
- 倉地暁美（1998）『多文化共生の教育』勁草書房
- 齋藤耕二・本田時雄編著（2001）『ライフコースの心理学』金子書房
- 坂田義教（1985）「概説マージナルマン」『現代のエスプリ211』
- 桜井由躬夫（1997）「特集ベトナム小百科 ドイモイ」『月刊しにか8月号』
- 永井智香子（1997）「日本人による異文化に関連した差別と偏見 学齡期に中国から来た若者たちにインタビューをして」『長崎大学留学生センター紀要 第5号 研究ノート』
- 中野亜理（1998）『ベトナム「工業化・近代化」と人々の暮らし』三修社
- 日本語教育研究会資料シリーズ編集委員会編（1996）『社会派日本語教師のすすめ』凡人社
- 吹原 豊（1999）「滞日ベトナム人日本語学習者に見る異文化接触の諸相 学習者理解のためのライフコース論を手がかりとしたケーススタディ」『東北大学文学研究科修士論文』
- 吹原 豊（2001）「ベトナム人日本語学習者の人生行路」『比較文化研究（アジア文化研究特集号）』、36-51
- D.W. プラス（1985）『日本人の生き方』岩波書店
- Son Nam（1996）*Viet Nam : at a glimpse* Nha Xuat Ban Tre